

女性会連盟100周年に向けて

日本福音ルーテル女性会連盟は、2028年に100周年を迎えます。そこで女性会連盟26期役員会では、これまで日本の基督教宣教の為に尽くして下さった宣教師の方々を、5回にわたって紹介しています。2回目は、大阪の釜ヶ崎「喜望の家」設立に尽力された宣教師エルスベート・ストロームさんをご紹介します。

白髪になってもなお実を結び 詩編 92 編 15 節

2022年10月6日、釜ヶ崎喜望の家に、宣教師だったボド・ワルターさんから一通のメールが届きました。そこに記されていたのは、エルスベート・ストロームさんが、10月5日午後5時に天に召されたという知らせでした。ストロームさんは、入居先の老人ホームの病室で、穏やかに眠るように亡くなられたそうです。2月に百歳の誕生日をささやかに祝いしてから8ヶ月後のことでした。

ワルターさんからのメールには、こう書かれていました。「ストロームさんの30年にわたる日本での、特に社会の周縁である大阪・釜ヶ崎での人々への奉仕という働きは、恵み多い働きであると同時に、大変に苦勞の多い、不自由さが刻まれた創造的な働きでありました。そして、その意義は、例えば、彼女が設立した釜ヶ崎ディアコニア・センター喜望の家をはじめとして、多くの人たちによって、引き続き受け継がれています。」

■生い立ち

エルスベート・ストロームさんは、1922年2月2日、南ドイツのヴュルテンベルク州フライハイムに、5人兄妹の長女として生まれました。両親が、受刑者援助団体による刑務所出所者のための一時滞在ホームの責任を担っていた関係で、



一家はドイツ国内で引っ越しを繰り返しました。

1945年、戦争の悪化とソ連軍の接近によって、一家は、それまで暮らしていたブレスラウ（現ポーランド南西部のプロツワウ）から、南ドイツへの避難を余儀なくされています。戦後、ストロームさんは聖書学校に通い、またミッドナイト・ミッション（ドイツで「売春問題」に取り組む基督教団体）とコンタクトを持ちました。

■来日から釜ヶ崎との

出会いまで

1953年の9月、ストロームさんは初めて日本へ宣教師として派遣され、ミッドナイト・ミッションの働きに従事しました。しかし、ドイツと日本の事情は違い、思うような働きが出来なかった彼女は、一度帰国した後1960年に再来日し、考えたうえでミッドナイト・ミッションを辞め、日本福音ルーテル教会での働きを求めたので

した。

彼女は、各地のルーテル教会を訪ねながら、自身のディアコニアの働きの場所を探し求められたそうです。1963年、日本各地のルーテル教会とコンタクトを持ち、大阪の釜ヶ崎を案内されたストロームさんは、その2年前に起こった釜ヶ崎暴動の新聞記事に触れた記憶を思い出し、これがストロームさんと釜ヶ崎との大きな出会いとなりました。

■釜ヶ崎での日々

1964年4月、ストロームさんは釜ヶ崎で働くことを選び、山王町に住居を借りて活動を始めます。頼まれて、乳児や幼児を預かることとなり、それが後の保育所、山王ベビーセンター（現山王こどもセンター）の始まりとなりました。

1970年には、釜ヶ崎地域で活動していた宣教師や牧師、キリスト者たちとエキュメニカルなグループ、釜ヶ崎協友会（現釜ヶ崎キリスト教協友会）を設

立、越冬支援などの活動を行っています。そして1973年頃からは、釜ヶ崎でのアルコール依存症の問題に関わり、1975年に断酒会「むすび会」を立ち上げました。その年に購入した古い倉庫兼住居こそが、翌年ストロームさんによって設立された『喜望の家』となったのです。

1977年には、日本福音ルーテル教会から重野信之牧師が派遣されて共に働くこととなりました。この頃、高校3年生だった永吉秀人牧師(日本福音ルーテル東京池袋教会)の言葉です。「ベビーセンターの暗がりには両腕に一人ずつ幼児を抱いたストロームさんがおられ、まだ木造であった喜望の家では重野さんが断酒会をされていました。生きるという圧倒的な重みにたたずんでいると、『立ってるだけなら帰りなさい。』と叱られたことは私の原点です。」

■ドイツへ帰国されてから

1983年に定年を迎えドイツへ



帰国されたストロームさんは、ブラウンシュバイクに住んで、その間に指圧を習い、80歳の時に指圧師の資格を取っています。

2003年にシュロス・シュヴァンベルクに移り、指圧治療を始めますが、翌年病気になり2005年からは終の棲家となるキッチンゲンの老人ホームで生活されていました。

ワルターさんの言葉です。「エルスベート・ストロームさんは、次のような堅い信仰に生き、祝福に満ちて働かれました。『わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。』(ローマの信徒への手紙14章8節)

彼女自身が葬儀のために用意してあった言葉は、次の通りです。「わたしは彼の星を見ました。／それは、エルサレムの上ではなく、／王の宮殿の上にもなく、／神殿の上でもなく、／厩の上に輝いていました。／そして、わたしはそれに従ってきたのです。(マタイ2章より)」

最後に、ストロームさんの百歳のお祝いにお手紙を贈られた、喜望の家代表・秋山仁牧師に届いたお返事のお手紙です。

「親愛なる秋山さん、お便りと美しい透かし絵のカード、そして写真を送っていただき、ありがとうございます。私は、それらを窓のそばにある机の前に立てて飾って、いつも見えています。そして、私は、この大きな贈り物をとても嬉しく思い、また感謝しています。

私の百歳の誕生日のお祝い

が遅れたというのは、問題ではありません。私は、どなたでも、まだ、お祝いの手紙を書いて下さることを本当に喜んでいます。

喜望の家は、いかがですか。あなたが、お便りで喜望の家の様子を短く報告して下さったことを感謝して喜んでいます。そして、喜望の家の活動がうまくいっていることも喜んでいます。

私は、年相応に元気です。私は、時々、大阪や釜ヶ崎のことを思い浮かべては、あそこは、今どんな風だろうか、すべてがこれからも続いていくのだろうか、と考えてしまいます。

私は、あなた方の働きが、特にあなたが見聞きして経験する中で必要となる働きが、これからもうまくいくことを願っています。

私は、あなたとあなたの同僚の皆さんに、まだまだお会いしたくない皆さんにも、心からの挨拶を送ります。そして、神様の祝福がありますように、あなたがたの釜ヶ崎での日々の働きの上に、これからも神様がともにいてくださることを願っています。また、もし、まだ私の知っている誰かがそこにいらっしゃるならば、その皆さんにもよろしくお伝えください。

エルスベート・ストローム」

■ ■ ■ ■ ■

釜ヶ崎におけるストロームさんの尊いお働きに心より感謝いたしますとともに、ストロームさんのみ霊が、主のみぎわで永遠の安らぎのうちに憩われますようにお祈りいたします。(まとめ26期役員会)